

人生後半を「私」らしく楽しく生

出合いに導かれた人生。 社会に声が届きにくい病児と家族に 寄り添い、遊びや食事で支える。

古いマンションの一室。真っ白な
割烹着姿で手早く具だくさんの卵
を焼き、炊きたてご飯をチャチャツ
とおにぎりにし、最後に手作り寒



坂上和子さん「お母さん食堂」主宰

さかうえ かずこ ●認定NPO法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」理事長、保育士、社会福祉士。1954年生まれ。新宿区立保育園、心身障害児の訪問指導員などを経て現職。共著に『病院で子どもが輝いた日』がある。右・事務所の台所で「お母さん食堂」の弁当作り。左上・火曜の「おにぎりランチ」100円。より充実した土曜のランチは200円。左下・ランチを近所の大病院の病室まで届ける活動への支援。寄付は、<http://www.hospitalasobivol.jp>まで。

天をとこ天突き器でツルン！
「どう？ 今日の日ゼライト」
1セット100円のランチを完
成させると、休む間もなく近くの
大病院小児病棟で待つママたち
の元へと自ら配達する。

認定NPO法人「病気の子ども
支援ネット遊びのボランティア」
(以下、遊びのボランティア)活動
の一環で、入院中の病児の母親に
お弁当を届ける「お母さん食堂」
の代表を務める坂上和子さんだ。
当事者でなければその困難を理
解しにくい、入院中の病児とその
家族を支援する遊びのボランティ
アを始めたのは1991年。

闘病のつらさに加え、親子とも
に社会やコミュニティから切り離
されたような孤立無援感にさいな
まれる入院児の現実を知ったこと
が、活動の出発点だった。

「入院児はベッドの上が生活のす
べて。遊びを奪われ、きょうだい
や友人にも会えず、食事も行動も
制限されます。親のいない時に乳
幼児が声が嘎れるほどママを呼ん

坂上さんのこれまで(おもな出来事)

- 1954年 0歳 大分県別府市で生まれる
- 1961年 7歳 母は自死、父は蒸発
- 1964年 10歳 カトリック系の児童養護施設に入所
- 1974年 19歳 上智社会福祉専門学校入学
- 1977年 22歳 保育士(新宿区職員)として保育園に就職
- 1991年 36歳 国立国際医療研究センター小児病棟に「遊びのボランティア」を立ち上げる
- 2000年 45歳 離婚する
- 2001年 46歳 明治学院大学社会学部に入学し50歳で卒業
- 2006年 51歳 認定NPO法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」を立ち上げる
- 2013年 58歳 武蔵野大学大学院に入学し60歳で修了
- 2018年 63歳 「お母さん食堂」を始める

でも看護師は抱きあやす余裕がな
い状況に、何かできないかと」

感染やプライバシーなどの課題を
医療機関側と話し合い、仲間の保
育士ら6人で活動をスタートして
今年で28年。当初から母親たちが
置かれた困難にも胸を痛めてきた。

「24時間、子どもに付き添い、常
に緊張し食事はコンビニ弁当やカ
ップ麺。心身ともにギリギリです」
非公式に行ってきたお弁当の差
し入れを去年、「お母さん食堂」と
名付け週2回、安価で届けること
に。資金に余裕はなく明日をも知
れない活動だけど、坂上さんの表
情は明るく、ケセラセラと構える。

「人生つてうまくできてるの」

自身も厳しい子ども時代を過
した。児童養護施設を経て進学し
た上智社会福祉専門学校で、ナチ
ス強制収容所を生き延びた著者の
手記『夜と霧』の翻訳で名高い心
理学者の霜山徳爾さんに直接学ん
だことで人生の見方が変わった。

「アウシュビッツの地獄を思えば
自分は何て恵まれた環境にいるの
だろう、と。先生の授業を聞いて
幸福の物差しが変わりました」
40代半ばで離婚。その後大学、
大学院へ進学する。まだ60代。社
会福祉で学んだ市民ボランティア
を小児医療のシステムに組み入れ
るという日本の試みにこの先も
挑戦し続けていく。